

都道府県別賞一等

祖父の病気と未来への備え

鹿児島県 西之表市立種子島中学校 三学年

江口 未佳

「じいちゃん、今までありがとう。」

私たち家族は病室に集まって、ベッドで眠る祖父の手を握り何度も感謝の言葉をかけた。祖父の呼吸は次第に細くなり、握っている手が冷たくなってきているのを感じた。しばらくしてから、ドアが静かに開く音が聞こえ、医師が病室に入ってきた。医師は、そっと祖父の腕を手に取り、脈を確認し、目にライトを照らすと、私たちの方を向いて、ゆっくりとした口調で亡くなったことを告げた。傍らで涙を流す、祖母と母の姿を見て、祖父を懸命に看護した日々の記憶がよみがえってきた。

私の祖父は、長年保険会社の個人代理店を経営していた。そのため、経験豊かな人であり、日頃から「保険は、人と人とを繋ぐ大切なサービスだから、人を大切にしないさい。」が祖父の教えだった。祖父は、保険の仕事を通して多くの方から信頼され、いつも家には相談を受けにお客さんが訪れた。

しかし、そんな懸命に働く祖父は、数カ月前、突然の病にかかり、寝たきりの闘病生活を送ることになった。祖父の病気が分かったとき、私たち家族は悲しみと不安で一杯だった。祖父は私たち家族にとって頼りになる存在であり、祖父が寝たきりになったことは、大きな衝撃だった。

このような経験をしたことが無い私たち家族は、寝たきりの祖父を看護するために、病院の先生に相談して様々な看護サービスを受けることにした。

祖父の家には、電動式介護用ベッド、車椅子用介護スロープが届いた。訪問看護事業者と、週三回のデイケアや容体の急変に備えて二十四時間電話連絡がとれるように契約もした。私たち家族は、看護ケアの知識もなかったため、看護師の専門的なサポートが必要不可欠だった。それらの看護サービスを受けたとき、私たち家族は、医療保険の重要性を深く感じるようになった。

祖父は、長年保険代理店を営するなか、若く健康なときから医療保険に加入していたため、私たち家族は、突然の病気による経済的負担を和らげることができた。保険を利用して祖父の治療費の一部がカバーされ、私たち家族は心配しながらも祖父の看護に専念することができた。祖父も、医療保険の備えがあったことで、可能な限り安心して快適な環境で過ごすことができたと思う。

しかし、私たちの思いは届かず、祖父の病気は進行していき、次第に細くなり体力を失っていた。祖父のために全力を尽くしたが、ついに祖父はこの世を

## 第61回中学生作文コンクール

去ってしまっただ。祖父の死は、私たち家族にとって大きな喪失であり、悲しみでいっぱいだった。

祖父の病氣と看護サービスをとおして、保険の重要性を改めて感じる事ができた。祖父は、最後まで保険の仕事を全うしたと思う。保険による備えの大切さを自分の闘病生活を通じて私たち家族に教えてくれた。私も祖父の意思を継ぎ、社会に出て大人になったら、健康な時期に保険に加入して、未来に備えていきたいと思う。他界した祖父の教えを胸に刻みながら、私は保険に関する理解を深める事ができた。

保険は、健康な時期に加入することで、将来の不測の事態に備えることができる大切なサービスである。祖父のやさしい笑顔を忘れず、健康と家族の将来を守るため努力したいと思う。そして、保険の大切さを一人でも多くの人に伝えることで、みんなの幸せな未来を支える助けになりたいと考える。